

第Ⅰ部の目的は、ラッセルが採用していた形而上学的立場、つまり「論理的原子論」という存在論的体系の構造をまとめ、第Ⅱ部以降の考察のために必要な論点を取り出すことにある。

論理的原子論の体系自体はこれまでもよく議論に取り上げられ、また「不完全記号」の学説や「記述理論」についても、その内容はよく知られているところである。しかしながら、それらの学説や理論がいかなる役割を果たすべきものであるかに関しては、いまだにほとんど理解されていないと思われる。そのために、ラッセル哲学の全体において、特に外界論との関連において、それらの学説や理論がどのように用いられているかを論じる際に、従来の解釈者たちは決定的に誤解をし、ラッセル哲学の潜在的な力を十分に引き出すことができなかったのである。そこでこの第Ⅰ部では、論理的原子論の原型とも言える、1903年の『数学の諸原理』（以下、『諸原理』と略す）の形而上学の説明から始め、その内在的な困難を克服する過程で不完全記号の学説が発案され、論理的原子論の形而上学が形成されたことを示す。

第1章では『諸原理』の形而上学を取り上げ、それを特徴づける三つの存在論的テーゼを特定する。そして表示やクラスに関するパラドクスなど、この時期にラッセルが頭を悩ませた問題が、それらのテーゼに起因することを明らかにする。

第2章では、それらの問題を解決するために発案された不完全記号の学説がいかにして、またどの程度問題を解決したかを示す。私見によれば、ラッセル自身の解決は不完全であり、さらに論理形式という存在者の導入によって問題が悪化している面すらある。そこで、ラッセル自身の示唆に基づいて、問題を完全に解消することを試みる。

第2章のポイントは、不完全記号の学説の内容の理解ではなく、むしろその哲学的役割に関する理解を転換することにある。不完全記号の学説は従来、基礎づけ主義的、あるいは還元主義的立場にとつての理論的道具として理解されてきたが、本書では逆に、判断を通じて対象を適切に構成するための方法を定めた、構成主義的理論として理解する。つまりこの学説は、判断という主観的操作に依存的な対象と、判断から独立に実在する対象を区別しつつ、前者の対象がなぜあたかも自立の対象であると思われるのか、そしてそう誤解することがなぜ有効なのかを説明するためのものなのである。こうした不完全記号の学説の理解に、第Ⅱ部でさらに「不完全記号の形成過程はサブパーソナル・レベ

ルでの過程である」とする解釈が重ねられ、第Ⅲ部での外界論において必要不可欠な論点として活用されることになる。

第3章では、第2章での議論に基づき、判断を通じて構成される対象からなる秩序と、判断独立的な実在の秩序をはっきりと区別しつつ、それぞれの体系を定式化することにより、論理的原子論という形而上学的枠組みを完成させる。

第Ⅰ部の論述は、1903年から1918年までのラッセル哲学の展開について、歴史叙述として完全であることを意図してはいない。ここでの狙いは、あくまでも、本書の後半で外界論について議論する際に必要な概念上の枠組みを整えることにある。歴史叙述としての完全さを期するなら、命題の統一性問題やパラドクスと記述理論との内的関連や、フレーゲやウィトゲンシュタインとの影響関係についても論じるべきであろう。本書の記述は誤っているわけでも不正確なわけでもないが、記述の際にとる視点には一定の偏りがある、ということである。

第1章 前史——『数学の諸原理』の存在論

本章では、まずラッセル哲学の性格を決定づけた、論理的原子論の前史とも言える『諸原理』の「項」の存在論を取り上げ、その基本的特徴として、「直接実在論」、「実在論的論理観」そして「論理の普遍性」の三つのテーゼを見出す。そしてこの三つのテーゼがラッセルにいかなる課題を負わせたかを明らかにする。

1.1 関係の実在性をめぐる論争

「論理的原子論」という実在論的哲学を標榜する以前に、ラッセルは当時のイギリスで流行していた新ヘーゲル主義を支持していた。そしてこの立場から数や連続、量などの数学や物理学の根本概念を考察し、それらの学が含む二律背反を指摘するという研究を行っていた¹⁾。しかし、ムーアとともに新ヘーゲル主義を批判し、独自の実在論的哲学を形成するに至った。このような歴史的事情は比較的よく知られているが、本節では、ラッセルと新ヘーゲル主義との対決において争点となった関係の実在性をめぐる議論が、その後のラッセル哲学にとって重要なテーゼを用意したことを明らかにしたい。

ラッセルは、新ヘーゲル主義への批判の始まりをなす『ライプニッツの哲学』において、「すべての健全な哲学が命題を分析することから始めるべきであることは、まったく明白な真理であり、おそらく証明の必要はあるまい」として

1) MPD, pp.32-3 (邦訳 48-50 頁) を参照。新ヘーゲル主義時代のラッセルによる数学と物理学の哲学については、Griffin (1991) が詳しく論じている。

いる [PL, p.8 (邦訳 9 頁)]。ここで「命題 proposition」と言われているのは、文という記号、あるいは言明や発話といったその使用ではなく、それらの意味として想定されている存在者である。文の意味としての命題をどのようなものと捉えるかについて、ラッセルは以降の考察（とりわけ多項関係論）を経て見解を変えていくが、しかし命題の分析が哲学的考察の端緒となるという見解自体はその後一貫して保持している。ところがラッセルはこの見解を、実はブラッドリーやマクタガートといった新ヘーゲル主義者達から受け継いでいるのである²⁾。ブラッドリーもまた、さまざまな命題をどのように分析し、命題とその構成要素の存在論的立場をいかなるものとするかという論理的考察³⁾を通じて自身の形而上学を形成するのであり、哲学的探求の方法論に関してはラッセルと一致しているのである⁴⁾。

両者が一致して認めるのは、文の意味である命題の主語⁵⁾になる存在者を、自立自存的な実体であるとする、実体概念の論理的規定である。アリストテレスが個体的実体を「主語となり述語とならないもの」と規定して以来の、命題内における対象の論理的ふるまいを通してその存在論的地位を規定するという形而上学的探求に関する伝統を、新ヘーゲル主義者やラッセルもまた踏襲するのである。ラッセルと新ヘーゲル主義者との違いは、命題をいかに分析し、主語以外の要素の存在論的地位をいかなるものと見なすかにあった。そしてもっとも重要な対立点となったのは、命題の構成要素のうちの「関係」という存在者

2) 命題の論理的考察による形而上学的探求という手法がどのように形成されたか、およびロックからミルに至る経験論がどのように批判されたかを、Hylton (1900) は T.H. グリーンにまで遡って論じている。

3) ブラッドリーの哲学的名著の一つは、『論理学の諸原理 *Principles of logic*』である。

4) ラッセルと新ヘーゲル主義との対立を「イギリス経験論と大陸合理論の対立」の一変種と見なすことはできない。ラッセルは経験主義に対する批判を、新ヘーゲル主義時代から一貫してブラッドリーらと共有しており、PoM 以降も、ラッセルにとって経験論は、新ヘーゲル主義と同様に批判すべき立場にすぎない [PoM, §3. 以下では、PoM の参照箇所の指示は、ページ数ではなくセクション番号により与える]。ラッセルと新ヘーゲル主義の対立をあえて図式的にまとめるならば、「実在論と観念論の対立である」と考えるべきであり、ラッセルにとって経験論は批判すべき観念論の陣営に属するものだったのである。

5) 本書では、論理的・存在論的議論に登場する 'subject' という表現を「主語」と訳すが、以下の論述からも明らかのように、この「主語」は記号表現ではなく、文の文法的主語となる表現が意味する存在者であることに注意されたい。また、たとえば第2章以下で取り上げる判断論のように、感覚したり判断を形成する subject という概念も論じる必要が出てくるが、そうした認識論的な文脈では「主体」と訳すことにする。

である。

ここでまずはその対立を概略的に述べておこう⁶⁾。新ヘーゲル主義は、すべての命題は主語-述語形式を持ち、主語が実体であるのに対し、述語はその実体に内属する非自立的で依存的な存在論的地位しか持たないとする。関係命題も主語-述語形式に還元され、関係はそれ自体としては命題の構成要素ではなく、それ以外の構成要素からなる全体の持つ属性に還元される。ここから彼らは一元論や観念論といった形而上学的立場を導出しようとするのである。これに対し、ラッセルは関係が還元不可能な構成要素として命題に含まれているとし、実在すると認める。そして任意の命題の構成要素が命題の主語になりうることに基づいて、すべての存在者を一種の実体とし、多元論的かつ実在論的な形而上学を展開することになる。

表現とその意味の混同を避けるため、語や文といった表現には「……」を、それらの意味となる存在者には〈……〉を付して表すことにしよう。「ソクラテスはプラトンを愛している」という文は有意味であるが、その意味である命題を、いま仮に「〈ソクラテスはプラトンを愛している〉」と表記しよう。「ソクラテスはプラトンを愛している」という文は、ソクラテスとプラトンという人物の間に、前者が後者を愛するという関係が成立していることを主張するものであるため、〈ソクラテスはプラトンを愛している〉という命題は〈ソクラテス〉、〈プラトン〉、〈愛する〉という三つの要素を持っており、前二者を〈愛する〉が関係づけることによって成立する複合的な存在者であるように思われる。しかしブラッドリーによれば、〈愛する〉のような関係を、〈ソクラテス〉や〈プラトン〉のような対象と同等の存在とすることはできず、それゆえ先の命題を三つの構成要素に分析することはできない。

関係についてのブラッドリーの議論は、『諸原理』におけるラッセルの立場に対する根本的な批判となっている。その詳細については1.3で述べることにし、ここではそのごく一般的な論点のみを指摘しておきたい。ブラッドリーが「関係は不可能であり、関係を含む命題はそれを含まない形式に分析されねばならない」とするのは、おおよそ次のような考えによる。もし関係が関係項と同等

6) 以下の論述は、関係をめぐる論争がラッセルにとっていかなる意味をもったかを明らかにするためのものであり、この論争を客観的に解説するためのものではない。それゆえ、ブラッドリーの立場に対して、必ずしも公平な見方をとるものではないことを断っておく。この論争に関しては、Griffin (1993)、Candish (1996)を参照。

の構成要素として命題に含まれているならば、それは関係項とは独立な対象として存在していると見なすことになる。しかしそのときには、ある対象間に関係が成立するためには、互いに独立に存在する関係項となる対象と関係とを結びつける、新たな関係が必要になる。そしてこの関係についても同様に論じることができるなら、関係の成立の説明は無限後退に陥ってしまう。

もしも接合するものを堅固なものとして受け取るならば、他の堅固なものがどうやってそれとつながるのかを示さねばならなくなり、そしてそれを示すことはできない。もしもそれ〔接合するもの〕を、ある種の媒体であるとか、非実体的な様子のもので受け取るなら、それはもはや接合するものではない。[Bradley (1994), p.130.]

したがって、異なる存在者を結びつける関係のようなものは存在せず、関係の成立を主張している文の意味である命題が、関係という構成要素を含んでいるとすることはできない。そうした命題を、それが含む構成要素を取り出せるように正しく分析するなら、関係を含まない形式、すなわち主語-述語形式を持つものとしなければならない。

ブラッドリーによれば、関係命題は主語-述語命題に還元されねばならず、さらに述語を主語というより強い実在性を持つ存在者に内属する依存的な存在者としなければならない。つまり「ソクラテスはプラトンを愛している」という文が意味する命題は、〈ソクラテス〉および〈プラトン〉という命題の主語と見なしうる実体的な存在者が、それぞれ述語となる一定の属性を持つという事態からなるものとして分析しなければならない。

しかし関係の存在を還元するためには、議論はさらに進展せざるをえない。〈ソクラテス〉と〈プラトン〉が他のいかなるものにも依存しない、それ自体として自立的に存在する実体と見なすことは、それらが数的に異なる実体であるとするを意味する。しかし、それはすなわち、〈ソクラテス〉と〈プラトン〉の間に、差異という関係が成立していることである。したがって、関係の実在性の否定を一貫したものとするためには、それらが個体的で数的に異なる実体であることを否定しなければならない。そこでブラッドリーは、主語-述語形式という文法構造を持つ文、たとえば固有名に一定の述語が付される単称文において、その文法的主語となっている固有名が実体的な存在者を指示す

ること、そしてその指示対象が命題の主語になっていることを否定する。文の主語が意味するもの、たとえば〈ソクラテス〉のような個人でさえ、やはり述語的存在であり、真に実体的な存在の属性である。差異という関係が不可能である以上、すべての命題の論理的主語は数的に同一の、唯一の実体であり、いかなる命題もそれに複数の属性を帰属させるという論理的な形式を持つものとして分析されねばならない。ブラッドリーは、この唯一の実体を「実在 the real」や「全体 the Whole」と呼ぶ [ibid. p.40]。

こうして関係の実在性の否定から、ただ一つの実体が存在するという一元論的形而上学が帰結する。ブラッドリーは差異関係だけでなく、時間的先後関係や空間関係など、他のさまざまな関係の存在を同様に否定し、そうした関係の存在は現象に他ならず実在ではないとする。また、認識主体と認識対象、主体と客体の関係もまた同様の理由で否定される。ブラッドリーによれば、主体が一定の判断を下す、あるいは一定の認識を持つということは、実体としての主体と対象との関係ではなく、唯一の実体である実在における、その属性としての主体と他の属性との間に一定の論理的关系が成立することなのである。固有名を主語とする単称文が表現する命題も、その論理的な形式は仮言的であるとされ、固有名の指示対象とされるものも、唯一の実在に内属する属性という非実体的な存在者でしかないとされるのである。

このように、ブラッドリーにおいては、関係の否定に基づいて認識主体と認識対象の独立性が否定され、主体と認識対象の双方を実在という一種の絶対者の持つ観念として位置づけるという、反実在論的で観念論的な認識論的見解が導き出される。つまり、一元論および観念論という形而上学と認識論にまたがる立場が、命題は関係を構成要素とせず、主語-述語形式を持つものとして分析されねばならないという論理的見解からの必然的帰結として提示されるのである。この論理的見解を、ラッセルは「内的関係の理論」と呼び、それをブラッドリーのみならず、ライブニッツやスピノザ、カントからヘーゲルに至る大陸系の観念論と、パークリヤヒュームといったイギリスの観念論者の双方にとって、その観念論的体系を支える論理的礎石となる見解であるとする。そしてラッセルは、内的関係の理論を否定することによりそうした観念論的伝統を一挙に覆すこと、これを自身の論理学的考察の哲学的狙いとするのである。

ブラッドリーが関係命題の消去ではなく還元を目指す限り、すべての有意な関係命題は主語-述語形式を持つものとして分析されなければならない。し

かしラッセルは、主語-述語命題として分析可能な関係は対称的な関係に限られ、非対称的な関係はそうした分析をすることができないと指摘する。たとえば、「aはbよりも大きい」という文と「bはaよりも大きい」という文は意味が異なるため、それが意味する命題も異なるはずである。しかしラッセルによれば、「内的関係の理論」ではそれぞれの文に対し、意味の違いを反映した異なる命題を与えることができない。

ラッセルは次のように論じる。内的関係の理論に従えば、関係命題はその関係項からなる一つの全体の性質とされる⁷⁾。それゆえ、「aはbよりも大きい」という文の意味する命題は、〈ab〉という一つの全体がある性質を持つこととして分析される。そしてそれと同じ性質を、〈ba〉という先のものとは異なる全体が持つこととして、「bはaよりも大きい」という文の意味する命題は分析される。しかし、実は、一見成立するかに見える〈ab〉と〈ba〉の違いを、内的関係の理論の支持者は認めることができない。なぜならこの両者の違いを認めることができるのは、それぞれにおける〈a〉と〈b〉の間に先後関係を読み込んでいるからだが、しかしその関係もまた両者からなる全体に還元されるべきものである。そしてここで問題にされている関係は同じ先後関係であるから、残されるのは〈a〉と〈b〉を要素とする同じ一つの全体にすぎない。つまり、「〈ab〉」と「〈ba〉」という表記の上では先後関係が成立しているように見えるが、それらが意味する全体においてはその違いが抹消されてしまうのである。したがって、

全体〈ab〉を〈ba〉から区別するために……全体から、部分とその関係へと我々は押し戻されることになる。なぜなら、〈ab〉と〈ba〉はまったく同じ部分から構成されているのだから、aとbの間の関係の向きを保存するような、なんらかの側面における違いというものはないからである。〈aはbよりも大きい〉と〈bはaよりも大きい〉はまったく同じ構成要素を含んでいる命題であり、それゆえ同じ全体を生み出すものである。それらの違いはひとえに〈より大きい〉という関係が、第一の場合には〈a〉から〈b〉への関係であり、第二の場合には〈b〉から〈a〉への関係であるという事実存している。したがって、非対称的な関係とその逆関係における向き

7) PoM, §215を参照。

の違いは、関係の一元論的理論がまったく説明できないものの一つなのである⁸⁾。

まとめるなら、「部分-全体」や「実体-属性」という一元論者が利用可能な存在論的概念だけでは、関係の向きの違いを反映した関係命題の分析を与えることができない。それゆえ、すべての関係命題を主語-述語命題へと還元しようとする「内的関係の理論」は命題分析の方法として、そして形而上学を導き出すための論理的手段として適切なものとは認められない。

そこでラッセルは、ブラッドリーのような一元論者、あるいは観念論者とは正反対の分析を命題に与える。「ソクラテスはプラトンを愛する」という文が表現する命題は、〈ソクラテス〉と〈プラトン〉という数的に異なる実体的存在者の間に、〈愛する〉という二項関係が成立することからなる〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という複合的存在である。しかも、この命題が含む三つの構成要素の間には実在性に関する区別は一切なく、〈愛する〉という関係も、〈ソクラテス〉および〈プラトン〉と同様に、他の存在者の存在に依存することなく自立自存性を持つ、実体的存在である。関係命題をこのように分析する立場を、ラッセルは「外的関係の理論」と呼んだ。そしてラッセルは『諸原理』において、外的関係の理論に基づく多元論的でありかつ実在論的な形而上学を展開したのである。

1.2 『数学の諸原理』の意味論と存在論

項の存在論

以上のように、関係を命題の構成要素として、すなわち一定の存在者として認めることはいかなる帰結を持つか。すべての命題が主語-述語形式に還元されるべきだとするとき、その意味として対応する存在者が認められるのは、名詞（固有名ないし一般名）と形容詞にかぎられる。これに対して関係を認めるといことは、英語においてはその表現である動詞や前置詞の意味として対応する存在者を認めることを意味する。そこでラッセルは命題を表現する文法を手が

8) *ibid.*, §215. 言及されている二つの全体をラッセルは「(ab)」と「(ba)」のように「(……)」を用いて表しているが、本書での方針に従い「(……)」に改めた。またこの引用文におけるその他の「(……)」の使用も引用者によるものであり、原文にはない。

かりとして、命題がいかなる構成要素をいかなる仕方で組み合わせることからなるかという存在論的問題に取り組むことを提案する。

私見によれば、文法の研究は、一般に哲学者たちが考えてきた以上に、哲学的問題に対して多くの光を当てることができる。文法的区別が本物の哲学的差異に対応していると無批判に前提することはできないかもしれないが、しかし一方は他方の一応の証拠であり、しばしば発見のためのこの上なく有効な手段としうるのである。さらには、ある一つの文に含まれるすべての語は必ず何らかの意味を持つことを認めなければならないと私には思われる。言語において語は多少なりとも固定的な方法で使用されるが、完全に意味を欠いた音をそのように用いることは不可能であろう。それゆえ、我々が命題を哲学的に正しく分析しているかどうかは、命題を表現する文中の語のそれぞれに実際に意味を割り当ててゆくことで有効にチェックすることができる。哲学者たちが現在考えているよりも、文法は全般的には、正しい論理へと我々を導く近道であるように思われる。以下では我々は文法に、指導者としてでこそないが、ガイドとして頼ることにしたい。[PoM, §46]

関係文の文法形式に反して関係命題を主語-述語形式に還元し、単称文の意味する命題を仮言命題としたブラッドリーとは対照的に、『諸原理』のラッセルは、文の形式と命題の論理形式との対応を信頼したうえで、前者を手がかりにして形而上学的探求へと乗り出すのである。

そしてこの提案から第一歩を踏み出すときにも、ラッセルはブラッドリーとはまったく反対の道へと進む。ブラッドリーにおいては、文が含むいかなる語も命題の主語ではなく述語を意味し、論理的には、すべての命題の主語となるのは唯一の実在、全体であった。これとは対照的に、ラッセルはすべての語あるいは(文も含めた)複合的表現が、文の主語となりうることを理由として、すべての語の意味となる存在者は命題の主語となりうるとする。そしてこのことを手がかりとして、自立的な実体とそれに依存的な属性というカテゴリーの区別を排し、すべての存在者は「項 term」という単一の存在論的カテゴリーに属すると主張する。

思考の対象でありうるもの、任意の真または偽の命題に含まれうるもの、一つとして数えることができるもの、そうしたものならば何であれ、私はそれを「項」と呼ぶ。それゆえ、これは哲学的語彙の中で最も広い語である。私はこれを、「単位 unit」、「個体 individual」、「存在者 entity」という語と同義のものとして使用する。前二者がすべての項が単一であることを強調する一方、第三の同義性はすべての項が存在を有しているという事実から派生している。すなわち、すべての項はある意味で存在する *is* ののである。ある人物、ある瞬間、ある数、あるクラス、ある関係、あるキマイラ、そしてその他の言及しうるものならば何であれ、それは確かに項である。そして一定の物が項であることを否定することは、つねに偽にならざるをえない⁹⁾。

この引用文の最後の一文が項というカテゴリーの包括性を示しているが、このように主張するとき、ラッセルは次のような議論を念頭においている。今、〈愛する〉のような関係が存在するが、しかし存在者の間にカテゴリーの違いがあり、関係は関係項に依存的な非実体的な存在者にすぎないとしてみよう。このとき、「愛するは項ではない」という文が有意味であり真であることになる。しかしこの文が有意味であるということは、この文の意味である〈愛するは項ではない〉という命題が存在することに他ならないが、この命題は〈愛する〉を主語としている。つまり何か項であることを否定するためには、それを命題の主語にしなければならない。だがそれはその何かを項と見なすことに他ならない。それゆえ項であることを否定することは「つねに偽にならざるをえない」のである。このようなラッセルの議論は、単に形而上学的議論として理解する限り、いささか説得力を欠くと言わざるをえない。しかし重要なのは、『諸原理』という著作においてこの議論がいかなる役割を果たしているかに注目することである。先の引用の直前で、「ここでこの話題を扱うのは、数に関するいかなる学説にとっても、あるいは変項の本性に関するいかなる学説にとっても、それが本質的だからにすぎない」[*ibid.*, §47] と言っているように、ラッセルの狙いは、項という単一の存在論的カテゴリーを設定することにより、数学を論

9) *ibid.*, §47. 以上の引用は、「主語と述語、実体と属性、実詞と形容詞、これとあれ」[*ibid.*, §47] など「一元論とモナド論、観念論と経験論」といった存在論的立場の区別に関わる論点として提示されている。

理学に還元するための強力な武器となる、無制限変項という論理的概念を導入することにある。つまり『諸原理』では命題分析という論理的手法によって形而上学が形成されるのだが、その形而上学の適切さは、それが数学と論理学を十分に分析できるかによって決まるのである。それゆえ、その形而上学に対する批判は、それが数学と論理学について適切な分析をなしえているかという観点から提起すべきである。そして1.3で確認するように、まさにこの「項」という包括的な存在論的カテゴリーのためにパラドクスが発生するのであり、それゆえラッセルはその形而上学を改めなければならないのである。

先の引用文中で、項は「個体」および「存在者」と同義であるとされているが、これは後の議論にとって重要な論点であるので、少し敷衍しておく必要がある。順序が前後するが、まず「存在者」と同義であり、すべての項が存在するとするとき、ラッセルはすべての項が一定の時間・空間的領域を占めるという意味で存在するとしているのではない。先の引用文で人物以外に、数やクラスといった抽象の対象、関係といった普遍者、キマイラという虚構の対象が項とされているように¹⁰⁾、ここでラッセルが主張しているのはそうしたさまざまな対象に共通に帰属させうる性質としての「存在 being」である。

存在は、すべての理解可能な項に、すべての可能な思考の対象に属する。手短かに言えば、真であれ偽であれ、任意の命題に含まれうるすべてのもの、そしてそうしたすべての命題自身に属する。……数、ホメロスの神々、関係、キマイラ、四次元の空間、これらのすべてが存在を有する。なぜなら、もしそれらがある種の存在者でないなら、我々はそれについて全く命題を作ることができなくなるだろうからである。[*ibid.*, §427.]

一方、一定の時間的・空間的領域内に存在することに対しては「現実存在 existence」という別の存在論的性質を設定している¹¹⁾。「存在」とは違い、「現実存在」はすべての項の性質であるわけではない。ラッセルは、存在し判断の

10) ただし、クラスを項として認めうるかどうかに関して、またキマイラのような虚構の対象、いわゆるマイノングの対象の存在に『諸原理』のラッセルがコミットしているかどうかに関しては、もう少し論ずべきことがある。これらについては1.3を参照。

11) 「現実存在は存在者のうちのあるもののみが持つ特権である。」[*ibid.*, §427.] ただしこの箇所では、時間・空間との関係は語られていない。

対象となる存在者が、現実存在するものに尽きておらず、特に普遍もまた存在し判断の対象となるということが、観念論および経験論の批判に際して決定的に重要な論点としており、それは「表示について」以降の形而上学的变化の後でも変わらないのである¹²⁾。

次に「項」は「個体」と同義であるとされていることに関しては、以下の点がきわめて重要である。項には以上の意味で現実存在する存在者以外に、時間・空間という枠組みの外部に存在する普遍もまた含まれていることを踏まえるなら、ラッセルの「個体」には普遍も含まれていることになる。ラッセルにとって「項」と同義であるとされる「個体」とは、単に他から自立自存する存在者であるという含みしか持たない。時間的・空間的位置づけを持ち、それにより他から数的に区別されるという意味での個性とはまったく関係がないのである。普遍と対照される個別存在者に対しては、ラッセルは『諸原理』においては(以下で見るように)「物 thing」、それ以降の著作では「個物 particular」という呼称を用いる。

この「個体」と「個物」の区別が重要なのは、ラッセルが「項」を単一の存在論的カテゴリーとすることにより、すべての項をその値とする無制限変項を論理的原始概念として採用したことと関連する。『諸原理』においてこの唯一の変項は、「x」や「y」で表記される、後に「個体変項」とされる概念である。つまりこの時点でラッセルの個体変項の変域には、個物のみならず、性質や関

12) OD 以降でも、存在と現実存在は区別されている。たとえば PP, p.57 (邦訳 124 頁) を参照。ただし、存在をめぐるラッセルの用語法は込み入っており、OD での不完全記号の導入によってそれがさらに見通し難くなるので、ここでその区別と推移を簡単に述べておきたい。周知のように、「命題関数が、それを充足する値を持つ」という意味でもラッセルは 'existence' の概念を用いる。そして 1905 年に (OD 以前に) 書かれた EIP では、この意味での 'existence' と、時間・空間中の一定領域に位置を占めるという意味での 'existence' をはっきりと区別している [EIP, p.486]。命題関数を充足しうる対象は、時間・空間中に位置を占めるものだけでなく、普遍のような抽象的な対象でもありうるため、前者の意味で 'exist' しうるのは、むしろ本文中 'being' という意味で存在する対象であると言える。そこで、命題関数が充足する値を持つという意味での 'existence' には、「存在」の訳語を当てることにする。ただし、やはり周知のように、この意味での 'existence' は、センスデータや普遍といった論理的原子に直接述語づけることができず、それを特定する何らかの記述を介してでなければ論理的原子について存在命題をつくることはできない。この点に関しては、25 で詳しく論じることとする。

ちなみに PLA では、時間・空間中に位置を占めるという意味での「現実存在」は、「時間中に存在する」という複合的概念として分析されるとされ、原始的概念であることが否定されている [PLA, p.223 (邦訳 159-60 頁)]。

係といった普遍、さらには命題もまた含まれていたのである。そしてその後、タイプ理論によって命題変項と関数変項が原始概念として導入されたときにも、依然として普遍は関数変項ではなく個体変項の値となるとされている。つまり、ラッセルにおいて普遍と命題関数はまったく異なる存在者なのである。この事実を見逃すことにより、ラッセルに対して実に多くの誤った解釈がなされ、筋違いの批判が投げかけられたのである。また私見によれば、ラッセルの哲学的方法論も、普遍と命題関数の区別を踏まえなければ正しく理解できないと思われる。それゆえ、本書ではこの論点にたびたび言及することになる。タイプ理論における普遍と命題関数については第2章で、方法論との関連については第5章で論じることとする。

項というカテゴリーに属する存在者の特徴としては、以上の意味での存在を有すること、および個性以外に、命題の論理的主語になること、不変不滅性と、それ自身に対する数的同一性およびその他のすべての項に対する数的差異性が認められている。これらの特徴づけについては、ここで詳論する余裕はないが¹³⁾、これらの特徴を持つことから、ラッセルが「実際、項は一般に実体に帰されているすべての性質を所有している」[*ibid.*, §47] と主張していることは押さえておかなければならない。ここでラッセルは、自立自存する実体と依存的存在である属性という二分法を認める伝統的形而上学に対し、一種の汎実体論的形而上学とも呼ぶべき立場に与していることを明言しているのである。

物・概念・命題

すべての存在者が項という単一のカテゴリーに属し、すべての項を実体とするとしても、ラッセルがいかなる存在論的区別も認めないわけではない。すでに取り上げたように、存在する項と現実存在する項、個物と普遍に相当する区別をラッセルは認めているからである。『諸原理』のラッセルは項の間のこの区別を、命題を表現する文中における語のふるまい、つまり文法的差異を手がかりとして、それぞれの語が意味する項の論理的特徴の差異として規定する。ラッセルが目にするのは、文中の語の役割についての、次のような直観である。

13) もちろん命題の論理的な主語になることに関しては、すでに論じたのでその必要はないだろう。不変不滅性と同一性について、ラッセルはムーアの諸論文 (Moore (1899), (1901-2)) を参照するよう指示している。これらの概念に関するムーアの見解については、Hylton (1990), pp.135-141 を参照。

たとえば、'Socrates is a man' という文があったとすると、『諸原理』ではこれは

〈Socrates is a man〉

という、〈Socrates〉、〈is〉、〈a man〉という三つの項から構成されている命題を意味するとされることになる。しかし、我々は 'Socrates is a man' という文を、〈Socrates〉という人物について、それが人間であることを主張するものとして理解することはできるが、〈is〉について、それが〈Socrates〉と〈a man〉という概念の間の関係であることを主張するものとして、あるいは〈a man〉という項について、それがソクラテスであることを主張するものとしては理解できないと思われる。つまり文の意味である命題の中には、その命題がそれについて一定の主張をなしていると思える項と、そうは見えない項があるのである。我々は「項」の概念の導入に際して、命題の論理的な主語を、命題を表現する文の主語が意味する存在者としたが、厳密に言えば、「命題がそれについて一定の主張をなしていると思える項」こそが「命題の論理的な主語」なのであり、たとえば 'Socrates loves Plato' という文では、主語ではなく目的語によって意味されている〈Plato〉もまた〈Socrates loves Plato〉の論理的な主語であるとされる。この命題は、〈ソクラテス〉と〈プラトン〉という二人の人物について、両者の間に前者が後者を〈愛する〉という関係が成立していることを主張するものと理解しうるからである。一方、ある語が動詞や補語として文に含まれているとき、その語の意味する項はその命題の論理的な主語ではない。

このような、文もしくは命題がどの項について主張しているかという、いわば「ついて性 aboutness」とでも呼べる区別を判明につけうるとすれば、次の点に注目できるだろう。すなわち、固有名は文においてつねに主語または目的語として生じるため、その意味する項について命題は一定の主張をなしているのだと、つねに見なすことができる。言いかえれば、固有名の意味する項は、論理的な主語という役回りにおいてしか命題中に含まれない。一方、一般名や形容詞、動詞や前置詞といった品詞は、その意味する項が論理的な主語になることなく命題に含まれることがありうる。ラッセルはこの違いを手がかりに、固有名によって意味される項を「物 thing」、それ以外の語によって意味される項を「概念 concept」と呼ぶ。物の例としては、「空間点、時間点、物質の小片、心の特定の状態、そして個別の現実存在するもの一般」が挙げられている¹⁴⁾。一方、

概念の例としてラッセルは、〈人間〉のような性質や〈愛する〉のような関係を使用しており、『諸原理』の「概念」は一般に「普遍 universal」と呼ばれる抽象的対象のことであると言える。概念はさらに、一般名や形容詞、述語 predicate もしくはクラス概念 class-concept と、動詞や前置詞などによって意味される関係 relation に区別される。この区別は、命題の中でその項が果たす役割に即した区別であり、クラス概念は 1.3 で取り上げる「表示」という論理的関係との関連で、関係は命題に含まれるときのその機能の特殊性により、他の項から区別される。

これまで取り上げてきた物、述語、クラス概念、関係は、いずれも一つの語によって意味される単純な項であったが、項が存在するという論点に関して先に引用した箇所から明らかのように、ラッセルは文の意味する命題もまた項であると、これまで項に帰されてきたすべての特徴——単一性、存在を有すること、他の命題の論理的な主語になりうること、不変不滅性、自身との数的同一性と他の項との差異性——を持つとする。一方で、命題は他の項にはない、複合性および真偽の別という二つの特徴を持つ。

命題は複数の項から構成されるが、しかしそれは項のクラスについても言えることである。命題の特徴は、統一性を持つ単一の存在者であることにある。ラッセルは、この命題と項のクラスの違いを、その言語表現の違いを手がかりにして説明する。〈ソクラテスは人間である〉という命題を表現するのは、「ソクラテスは人間である」という単一の文であり、先にも述べたように、この一つの文の使用によって〈ソクラテス〉という人物について、それが人間であるという内容の主張がなされる。そしてこの主張がなされることにより、命題は真偽いずれか一方の性質を持つものとして評価される。一方、〈ソクラテス〉、〈人間〉、〈である〉という項のクラスを表現するために必要なのは「ソクラテス」、「人間」、「である」という語のリストであり、語のリストは何の主張もしなければ、それに含まれている語の意味する項の間にいかなる関係があるかを

14) *ibid.*, § 48. ただし、同じ箇所「非ユークリッド幾何学の空間、そして小説の疑似的な存在者」のような現実存在しないものや個物とは見なせないもの、また指示する固有名を我々が持ち合わせていない項も物に含まれる。つまり、「固有名が意味する」という規定も、個物や現実存在といった概念との外延の一致も厳密なものではなく、結局のところ『諸原理』における「物」の理解は直観的なものにすぎないと言わざるを得ない。ただし後に「個物」と「普遍」を区別する際に、ラッセルはそれを『諸原理』における「物」と「概念」の区別を引き継ぐものとしており [RUP, p.169]、それらの区別の中心に個物と普遍という差異があったことは確かだと思われる。

まったく伝えず、真とも偽ともされない。

ラッセルは、この命題と項のクラスの違いを、やはり文法的現象を手がかりにして説明する。彼は、不定詞や動名詞としてではなく、動詞として用いられている動詞を文は必ず一つは含んでいなければならないという事実注目し、命題という項が持つ特異性は、動詞として用いられている動詞が意味する項の機能によるとした。動詞が意味する項は関係であったが、ラッセルは文中で動詞として用いられている動詞の意味する項を「関係づける関係 relating relation」とし、不定詞や動名詞が意味する項を「関係それ自身 relation per se」として区別する。たとえば〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という命題において、〈愛する〉という関係は〈ソクラテス〉と〈プラトン〉という二つの項を関係づけ、〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という命題に統一性をもたらしている。それによりこの命題は、項としての単一性を持つものとなっている。これに対し、たとえば「愛することは人間にのみ可能な感情である」という文が表現する命題においては、〈愛する〉はそうした機能を果たしておらず、命題の論理的主体になっており、他の項と関係づけられる項になっている。この命題に統一性を与えているのは、〈感情である〉という述語である。また〈ソクラテスはプラトンを愛する〉においては〈ソクラテス〉と〈プラトン〉という二つの項についての主張がなされ、真偽の評価が可能になっているのに対し、「愛する」を名詞化して「ソクラテスのプラトンに対する愛 Socrates' love for Plato」にするとき、それは主張するために用いることができず、真偽を問うことができなくなる¹⁵⁾。以上のような、関係づける関係である場合と関係それ自身という二つのケースにおいて、〈愛する〉が異なる項であるわけではないが、しかし命題への含まれ方によって異なる働きをしているのである。

命題の第二の特徴は、真偽という性質を持つことにある。ラッセルの真理論と言えば、「論理的原子論の哲学」などで表明されている対応説がすぐに念頭に浮かぶが、実はそれ以前にラッセルは、非対応説的な真理論を採用していたのである。『諸原理』の発表後に書かれたマイノング論において、ラッセルは次の

15) この句が表現する (Socrates' love for Plato) のような複合的項を、ラッセルは「命題概念 Propositional concept」と呼んでいる。後にラッセルは、文や語の表現する複合物についても「意味としての現れ」と「存在者としての現れ」を区別し両者の関係を考察するのだが (この区別については本章註 24 参照)、その際には文が主張するために使用されているときに表現されている命題が「意味としての現れ」とされ、対して命題概念は「存在者としての現れ」であり (…は真である) などの性質の担い手になるとされている [MDP, p.289, OF, p.366]。

ように主張している。

真偽に関しては、まったく問題は存在しない。あるバラは赤く、あるバラは白いが、まさにそれと同様に、ある命題は真であり、ある命題は偽なのである。信念とは命題に対する特定の態度であり、それら [命題] が真であるとき、それ [信念] は知識と呼ばれ、それらが誤っているとき、それは誤謬と呼ばれる。このように言ってしまうのであり、これが正しい見解であると私は信じる¹⁶⁾。

つまり真である命題だけでなく偽の命題もまた項として存在する。そして真偽は、この命題という項の持つ、定義不可能な内在的性質である。一定の命題内容を持つ信念を抱くということは、主体と命題という存在者との間に、信じるという二項関係が成立することに他ならない。このような真理論を採用するとき、対応説をとることは不可能である。なぜなら対応説は、事実によって真 (または偽) にされる命題と、命題を真 (または偽) にする事実との二分法を必要とするが、『諸原理』の存在論では命題そのものが実在であり、そうした「真にするもの」と「真にされるもの」との二分法が退けられているからである。むしろ『諸原理』において事実とは真なる命題のことに他ならないのであり、偽の命題も存在する以上、事実の総体は実在を尽くさないのである。

真または偽という性質を持つことにより、命題の間には、他の項の間には決して成立しない関係が成立することになる。それが「実質含意 material implication」である。任意の偽なる命題は任意の命題を実質含意し、任意の真の命題は任意の命題に含意される。現代の論理学における実質含意とは違い、『諸原理』のラッセルにとってそれは、命題という客観的実在物が真偽という客観的性質を持つことによって成立する実在的な関係であり、認識主体はこの関係をただ受動的に受け取るのみである [PoM, § 37]。通常、推論と言えば、主体が持っているある信念から、含意関係を通じて他の信念を形成することだと考えられるが、この時期のラッセルにとっては、客観的にすでに成立している含意

16) MTCA, p.473. また 1905 年の NT でも、存在を有すること、認識から独立であるという意味での客観性、複合性、そして真偽という性質の所有などの特徴が命題に帰せられている。NT, p.492 を参照。ただしこうした考えは決して確固としたものではなく、命題が事実を指示するという見解に説得力を認めて検討する [PD, MD] など、揺れが見られる。

関係をたどって、ある命題から別の命題へと移行することにすぎず、主体の心的作用が積極的、生成的に関与する余地はないのである。

『諸原理』の三つのテーゼ

これまで見てきた『諸原理』の存在論には、その後のラッセルの哲学にとって決定的に重要な役割を果たす三つのテーゼが含まれている。我々が本書で検討する1918年までの間、そのすべてをラッセルは保持できたわけではない。しかし可能な限りそれらを守ろうとし、また放棄する場合にも、できる限りそこからの離反を最小にとどめようと努力したのである。私見によれば、ラッセルの一見単純なようで実は核心がはっきりせず理解しがたいさまざまな見解——不完全記号の学説、分岐タイプ理論、多項関係理論、センスデータとセンシビリアからの外界の論理的構築など——は、『諸原理』で示された三つのテーゼを守りつつ、さまざまな哲学的問題を解決する試みを通じて形成されたのであり、またそうした観点から解釈して初めて正しく理解できるのである。

(1) 論理学は、記号や心的状態ではなく、実在の構造に関する研究である。

論理学が研究対象とする命題と含意関係が、文や音声などの記号、あるいは思考や信念などの心的状態ではなく、実在物である項とその間の関係であるとされていることから、ラッセルにとって論理学とは、実在を描写する何らかの表象媒体についての学ではなく、実在そのもののあり方を研究するものであることは明らかである。

ただし、経験科学に属する命題が、現実存在する時間や空間のあり方、実在する特定の個物や普遍のあり方について語り、それゆえそうした項を定項として含む命題であるのに対し、論理学（そして論理学に還元されるべき数学）の命題は、その他の経験科学とは違い、論理定項以外には変項しか含まない点で区別される。すなわち、論理学の研究の関心は、実在する個別の項（現実存在する個物や存在する普遍など）にはなく、「命題の形式的本質」、「命題のタイプ」[*ibid.*, §8]にあり、命題間の「関係の形式的性質」を描き出すことにある。そして、そうした形式的性質を表現するのが、含意関係やクラスの包含関係などについて述べる論理定項であるとされる。項の存在論に即してこの違いを言い直せば、まず経験科学が実在の空間の性質や物体の運動のあり方を研究することは、〈空間〉や〈空間点〉、〈原子〉や〈質点〉などの項が、その他の項といかなる関係にあるか、

それらの項を含む命題のどれが真という性質を持つか、他のどの命題と含意関係にあるかを研究することだと言える。それに対して論理学と数学は、互いに関係づけられた項と項、とりわけ互いに含意関係によって関係づけられた命題からなる、実在全体の普遍的な構造上の特徴（たとえば任意の偽の命題は任意の命題を含意していることなど）を描出することを目指しているのであり、そうした構造を作り上げている項として実際にいかなる物や概念が存在しているかは問題にしない。このような「実在の普遍的な構造の学」という論理学観は、1913年の『知識の理論』の執筆とその放棄を通じて懐疑を深めつつも、1918年までラッセルが保持していた見解であった。以下ではこのようなラッセルの見解を、「実在論的論理観」と呼ぶことにする。

(2) 認識主体は、自身の心の外部にある実在を直接知覚することができる。

それでは、命題も含め、項からなる実在の構造を我々はいかにして認識するのだろうか。この問題に対しては、先にマイノング論から引用した命題に関する見解にもっとも明らかであるが、我々は実在を直接知覚することによりそのあり方を理解するのだとラッセルは考えていた。各語が意味する物や概念といった単純な項を始め、命題という複合的な項や、命題間に成立する含意関係の理解に際して、「心は純粹に受動的である。知覚の際に心は純粹に受動的であると常識的に想定されているが、それと全く同様」[*ibid.*, §37]なのである。これは論理学の原始的概念である、論理定項の理解においても同様であり、「非定義概念に関する議論——これが哲学的論理学の主要部分を形成するのだが——は、心が赤さやパイナップルの味に対して持つような種類の面識をそれらに対しても持てるようするために、考察されている存在者をはっきりと見てとろうと、そして他者にもはっきり見てとらせようと努力することに他ならない」[*ibid.*, p. xx]とされている。『諸原理』において「面識¹⁷⁾ acquaintance」という語

17) 'acquaintance' は「見知り」とも「直知」とも訳されることがある。どの訳語にも一長一短があり、結局その意味は文脈から推し量らなくてはならないので、基本的にはどれを選んでもよいのだが、この中では「面識」が最善であると私には思われる。複数の方にこの点に関して疑問を呈されたので、私の考えを説明しておきたい。

まず、「直知」は我々の日常用語に存在しない単語であり、ラッセルの 'acquaintance' の訳語として、おそらくは「直接的知識」を省略して作られた語であると思われる。この語は、余分な含みを持たないため誤解を招くことがないという利点を持つが、それは同時に 'acquaintance' を理解するための手がかりがまったくないという欠点でもある。仮に「直知」ではなく「直接知」とする

が使用されるのはおそらくここだけだが、しかし項が語の意味であり命題が文の意味とされていることを踏まえるなら、後の意味理解に関する「面識の原理」が、すでに「諸原理」において採用されていると言えるだろう。すなわち、「理解可能なすべての命題は、面識されているものだけを要素とし、構成されているのでなければならない」[PP, p.32 (邦訳 72 頁), KAKD, p.154 (邦訳 253 頁)] という、意味理解に関する実在論的原理である。

ラッセルが、外界のあり方は直接知覚ないし面識によって理解されるとしたことは、新ヘーゲル主義との争点である関係の存在論的身分に関する議論と関連がある。前節で見たように、ブラッドリーは関係を内的とすることによってあらゆる差異関係を否定したが、これにより空間的關係の秩序を研究する幾何学や、順序關係の研究を含む数論などの数学は、実在ではなく現象を記述するにすぎないとされた。また、認識主体とその対象との区別が認められず、判断を形成することを、その本性において同一の属性間の關係とした。つまり、実在そのものではなく、その現象という観念的存在間の、矛盾を含む体系に貶められてしまっているのである。ラッセルがこうした見解に対抗して外的關係の理論を採用したことはすでに見たが、それによりラッセルは、数学が扱う關係的諸事実の実在を認めることができただけでなく、そうした実在について主体が理解するということを、認識主体と実在というまったく異なる対象の間に知覚に類比的な二項關係が成立することだとしたのである。

外的關係としての直接的な知覚、あるいは面識という考えによって批判されるのは、新ヘーゲル主義のような合理論的、一元論的な観念論だけではない。ラッセルと新ヘーゲル主義者との対立を、イギリス経験論と大陸合理論の対立の焼き直しとする誤った解釈のために見逃されがちであるが、イギリスの哲学的伝統とされる経験主義的で原子論的な観念論も、ラッセルは同様に批判する

としても、どのような意味で「直接的」であるとされているのかが分からないため、あまり効果はない。読者がラッセル哲学についてある程度予備知識を持っていることを想定できる状況であれば、この訳語を用いても問題はないが、そうでない場合は使用を避けるほうが良いと思われる。

その点、「面識」と「見知り」は、「…氏とは面識がある」や「…氏と顔見知りである」など、日常用語での使用例を手がかりとして 'acquaintance' という知識の直接性に関する一定の理解を得ることができる。このような日常言語での用法は、ラッセル自身が説明のために引き合いに出す状況に一致しており [PP, pp.31-2 (邦訳 71 頁)], それに訴えることは適切であると思われる。もちろん、哲学用語としての 'acquaintance' とは意味上のずれがあるが、それは註をつけるか、あるいは議論を通じて埋めていくべきものである。そしてこの二つのうちでは、「見知り」よりも「面識」の方が翻訳などの際に自然な文章を作りやすいという実際的な理由で、「面識」の方を選ぶことにした。

のである。關係に関する論点に基づくパークリやヒュームに対するラッセルの批判は、『哲学入門』での普遍に関する議論が比較的知られているが、『諸原理』の時期にすでに経験論に対する批判が為されている。たとえば『諸原理』の真理論が、命題という実在物の内在的性質とする見解であったことはすでに見たとおりであるが、実は同時期に経験主義的に理解された真理の対応説が批判されているのである。1905年の「真理の本姓」でラッセルは、命題が心的な観念からなるものであり、それが実在と対応することによって真あるいは偽という性質を担うという、ロック流の経験主義的な代表象説の真理対応説を批判している [NT, pp.493-5]。そしてその論点は、この対応説では観念と実在の対応を見てとることができなくなるという、「知覚のヴェール」説という有名な論点を彷彿とさせるものである。

このように、ラッセルにとって、認識とは、観念や表象のような心的対象ではなく実在そのものを直接知覚することであるというテーゼはきわめて強固なものであった。そして1919年の「命題について」において面識の概念を放棄するまで、ラッセルはこの直接知覚説のテーゼを保持し続けようとしたのである。

(3) 論理学は実在全体の普遍的な構造についての学問である。

論理学が実在の形式について語るとする点では、『諸原理』以降もラッセルは一貫している。だが、『諸原理』ではすべての項が同じ変項(個体変項)の値となるとされており、値として取りうる存在者によって変項のタイプを区別する、『プリンキピア』以降の体系とは異なる。『諸原理』では 'x' のような個体変項に対する記号だけでなく、'p' や 'q' のような命題変項に対する記号も用いられてはいる。しかし「純粋数学のすべての命題においては、それが完全に述べられたときには、その変項は完全に無制限な変域を持つ。理解可能な任意の存在者は、我々の命題〔純粋数学の命題〕の真理を損なうことなく、その任意の変項の一つと置き換えることができる」[*ibid.*, §7] と言われているように、すべての項は同一の変項の変域に属する。個体変項と命題変項の区別は、記号法上の便宜にすぎない¹⁸⁾。

ラッセルが実在物の間に「実体-属性」のような実在性の区別を認めず、すべ

18) ラッセルの論理学および数学の哲学における無制限変項の原理の重要性とその役割については、Cocchiarella (1980)、Hylton (1990)、pp.201-6、Landini (1993) を参照。

てを自立自存的な対象とし、そして命題という複合的存在も単一性・個体性を持つとして、「項」という単一の存在論的カテゴリーを設定したのは、こうしてすべての存在者を同一の変項の値とすることを可能にするためであった。この形而上学的見解の論理的表現である無制限変項の原理を認め、さらに任意の命題関数からクラスの生成を可能にする包括原理 Comprehension Principle に相当する見解をとることで、クラスのクラス、クラスのクラスのクラスなども、項という同一タイプの対象とすることができる。これにより、たとえば自然数を相似クラスのクラスとして定義することが可能になる。このように、『諸原理』における論理の普遍性のテーゼは、数学的对象を論理的に定義し、数学の定理を論理学の命題に還元しようという、論理主義のプログラムを推進するための強力な武器を提供するものとして構想されているのである。

1.3 「数学の諸原理」の存在論の問題点

しかし『諸原理』の汎実体的形而上学には、さまざまな深刻な問題が含まれていた。ここでは、命題、表示、クラスという三つの問題に分けて論じることにしよう。

命題の統一性と客観的な偽の問題

命題に関して生じる問題は「命題の統一性 unity of proposition」問題と呼ばれており、ブラッドリーがこの論点を用いて批判した『諸原理』のみならず、記述理論を始めとした不完全記号の学説を採用した後も、ラッセルに重くのしかかる難問であった¹⁹⁾。先に見たように、命題は複数の項から構成される複合的存在者であるが、統一性を持つ単一の存在者であり、それ自身一つの項であるとされている。そしてこの統一性は、関係づける関係が関係項となる項を相互に結びつける役割を果たすことによるとされていた。しかしこの「関係づける関係」と、命題の論理的主語になりうる「関係それ自身」との違いを、項

19) 現在でもこの問題は、形而上学や意味論に関する重要な問題として取り上げられることがある。たとえば Armstorong (1978) は、ここから「裸の基体」としての個物の概念に対する批判を引き出す。Sainsbury (1996) は、「直接指示」の理論家による PoM の命題論の再評価という文脈でこの問題を取り上げ、検討の必要性を強調している。ラッセル自身は、1918 年の PLA において、普遍的存在性格を再考することでこの問題を解決しようとする。これについては 24 を参照のこと。

の存在論に内在的に説明しようとするとき、大きな困難が生じるのである。

関係それ自身は問題なく認めることができる。すなわち、固有名の意味する物と同様、他のすべての項から独立に、数的に異なるものとして存在する項である。しかし、この関係それ自身に何加わることにより「関係づける関係」になり、命題を統一する能力が与えられるのだろうか。ここで関係それ自身がある性質を持つために関係づける能力を持つのだとしてみよう。たとえば〈愛する〉という関係それ自身は関係づける能力を持たないが、それが性質〈a〉を持つときには他の項を結びつけて命題を形成するとしてみよう。しかし『諸原理』の項の存在論に従うなら、〈愛する〉が〈a〉を持つということは、〈愛する〉と〈a〉という二つの項を構成要素とする命題が真であるということであるはずである。何かが項であることを否定することは矛盾であるとされていたため、〈a〉もまた項でなければならないからである。それゆえ、〈a〉もまた命題の論理的主体となりえ、それゆえ関係づける能力を持つことなく存在することがありうることになる。すると今度はこの〈a〉について、関係づける能力を持っている場合と持っていない場合の違いを説明するという課題が生じることになる。そしてここまでの議論から明らかなように、項の存在論の枠内でこの課題に答えようとしても、同様の問題が生じるばかりであり、解決することは不可能であると思われる。

この問題は、項の存在論にとって本質的な特徴からの必然的な帰結であると思われる。すなわち項の存在論は、思考の対象としうる任意の内容をすべて自立的对象とし、それを項という実体的存在とする。それゆえ、命題に統一性をもたらすものが何であれ、それについて我々が考察しうる限り、それもまた一つの項とせざるをえず、命題の統一性の説明が先送りされることになってしまうのである。それゆえ、命題の統一性問題は、すべての論理的对象が項という単一のカテゴリーに属することを前提とする、論理の普遍性の問題にかかわる問題であると言えるだろう。

結局ラッセルは、この問題が解決不可能であることを認めざるをえない。

つまり命題は本質的に統一されたものであり、分析によってその統一が破壊されてしまうなら、どんなに構成要素を枚挙しようとも命題は回復しない。動詞 [が意味する関係] は動詞として用いられているときには命題の統一性を含み、それゆえ項として考察される動詞 [が意味する関係] とは異なるので

あるが、しかしこの区別の本性がまさに何であるのかについて、明確な説明を与えるにはどうすればよいのか、私には分からない。[*ibid.*, §54.]

統一性は真偽を問わず命題一般について問題になるが、とりわけ偽の命題に関して問題はより深刻になる。ラッセルは真なる命題を「事実」、偽の命題を「虚構」と呼んでいるが、これは真の場合と偽の場合で命題の存在性格に違いがあることをなんら意味するものではなく、どちらも存在を有する (have being) 抽象的で客観的な実在物、すなわち項である。そして信念が間違っているということは、客観的に存在する偽の命題に対して信じるという二項関係が成立しているということだとされる。こうした見解は『諸原理』から1905年の論文「真理の本性」まで支持されていた。しかし1906年の論文「真理の本性について」の第三部から、命題の実在論に対して疑念が表明され始める。このときラッセルが問題として取り上げるのが、「信念が間違っているとき、我々は何を信じているのか」という問題、すなわち客観的な偽の問題である。ラッセルはこの論文では、「客観的な非-事実」²⁰⁾を認めることの問題を詳述せず、それ自体としてもっともらしさを欠く見解として扱っているが、実際には、客観的な偽を認めることは、単に反直観的であるという以上に、『諸原理』の体系にとって内在的な困難となっていると思われる。

『諸原理』の命題論では、命題が統一性を持つのは、その構成要素である関係づける関係がその他の項を実際に関係づけるからであると説明されていた。だがここで、「東京23区と仙台市は人口が等しい」という偽の文が意味する命題を考えてみよう。〈東京23区と仙台市は人口が等しい〉が一つの命題である以上、〈人口が等しい〉という関係は、〈東京23区〉と〈仙台市〉という項を実際に関係づけていなければならない。しかし一方で、「東京23区と仙台市は人口が等しい」という文が偽であるということは、〈東京23区〉と〈仙台市〉との間に、〈人口が等しい〉という関係が成立していないということではないだろうか。すなわち、ある関係命題が偽であることは、その関係が命題の主語の間に成立していないということの意味するはずである。そうである以上、〈人口が等しい〉は、〈東京23区〉と〈仙台市〉を関係づけていないとすべきだろう。しかし『諸原理』の立場では、そう認めることは〈東京23区と仙台市は人口が

20) ONT, p.46を参照。

等しい) という命題の統一性の説明を放棄することを意味する。

もちろん『諸原理』の立場を一貫させるため、関係が成立していないのではなく、関係は成立しているのだが、それによって構成される命題が真ではなく偽という性質を持つのだと言い張ることは可能である。しかし、『諸原理』では真偽という性質は定義不可能であり、それが何であるか、そして命題がそれを有しているか否かは、単に主体が知覚するしかないとされている。そのうえさらに真理と虚偽、事実と虚構の違いが、関係が関係項を関係づけているかどうかすら反映しなくなるのだとすれば、それは単に虚偽に関して反直観的な立場を維持しているだけでなく、真理の区別に関して一切のまともな理解が不可能になることを意味するのではないだろうか。我々がある事実を知覚する、すなわち真なる命題を見てとるとき、偽なる命題を見てとるときで、いかなる違いがあるのかを理解する手がかりがまったく奪われてしまうと思われる。

表示の役割

文を構成する語が単純な項を指示し、それらの語からなる文がそれらの項からなる複合的な項、すなわち命題を指示する。このような『諸原理』の意味論に従うなら、命題が何らかの内容を帰属している対象自身が、命題の構成要素になることになる。たとえば〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という命題は、〈ソクラテス〉という項について、それはプラトンを愛すると主張するものであるが、このとき、〈ソクラテス〉という項自身が命題の構成要素となっている。また面識の原理という意味理解の原則に従うなら、〈ソクラテスはプラトンを愛する〉という命題を理解している人は、〈ソクラテス〉という人物を面識していることになる。

しかし、以上のような意味論および意味理解の原則が成り立たない場合があるように思われる。たとえばラッセル自身の挙げている例 [PoM, §56] であれば、「私はある男に会った I met a man」という文が表現する命題は、発話者である人物、会うという関係、そして「ある男」という表現が意味する項を構成要素とすることになるが、この最後の項は特定の人物ではなく、「男 man」というクラス概念と関係するある種の概念であると思われる。今この概念を〈ある男〉と表現することにしよう。すると「私はある男に会った」という文は〈私はある男に会った〉という命題を意味すると言える。しかしながらこの文が発話されるとき、発話者は〈ある男〉という概念について、自分はそれに会った

と主張したいのではないだろう。なぜならそうした概念は「通りを歩いたりせず、論理学書の薄暗い辺境に住んでいる概念である。私が出会ったのは概念ではなくある物であり、なじみの仕立て屋や銀行口座を持っていたり、行きつけの飲み屋や酔いどれの女房がいたりする現実の人物」[*ibid.*, §56] だからである。つまりこの命題が主張している内容は、その命題が要素とする項についてのものではない。

ラッセルは、「man」や「king」のようなクラス概念を意味する一般名詞に、「all」、「any」、「every」、「some」、「a」、「the」が付されてできる複合的表現が文中に生じる場合、こうした現象が生じるとする。そうした表現は『諸原理』では「表示句 denoting phrase」と呼ばれるが、表示句に対しては、その他の表現よりも一段階複雑な意味論が与えられている。すなわち表示句は「表示概念 denoting concept」というある特殊な概念を意味し、この表示概念がさらに他の対象を「表示する denote」という、もう一つの意味論的關係が成立するとされるのである。そしてこの表示という関係により、表示概念を含む命題は、表示概念についてではなく、表示される対象についてある内容を主張するものとなり、またその対象にその内容が当てはまるかどうかによって真偽が決定されるのである。「all」など六つのケースで、表示句が意味する表示概念も、表示概念が表示する表示対象もそれぞれ区別される。表示概念そのもののあり方についてはラッセルはそれ以上ほとんど論じていない²¹⁾。一方、表示対象間の区別に関しては詳細に論じている [*ibid.*, §61] が、本書で取り上げる必要があるのは「all」と「any」、そして「the」の場合のみである。「all」の場合は、表示句が含む一般名が意味するクラス概念という性質を持つ、すべての項からなるクラスが表示対象となり、「any」の場合そのクラスの要素の任意の一つが表示対象となるとされる。それゆえ、以下では特に「all」を含む表示句を「クラス名」と、そしてそれが意味する表示概念を「クラス表示概念」と呼ぶことにしよう。

21) ただし、表示概念は「all」などが意味する部分とクラス概念という要素からなるという複合性を持たず、単純な概念であるとされていることから、表示概念はクラス概念と何らかの密接な関係を持ちつつも、別個の概念であることだけは主張されている。PoM, §72を参照。しかし後にラッセルはこの点に関して見解を改め、表示概念は複数の要素からなる複合物であり、それが表示する対象はそれらの要素の関数として決定されると考えるようになる [DVD]。その結果、表示概念は「表示複合 denoting complex」と呼び改められ、命題との共通性と差異性（とりわけ、要素を変項に置き換えることによって関数が生成すること）が考察すべき論点として浮上してくることになる [MD]。この点については中川（2001）を参照。

「the」の場合は、後の確定記述の分析と同様、表示句が含むクラス概念を持つ項がただ一つだけ存在する場合に、その項のみを表示対象とするとされる。以下では、記述理論採用後の見解に関する議論との連続性に配慮し、「the」の場合の表示句を「記述句」、そしてそれが意味する表示概念を「記述」と呼ぶことにする。つまり本書では、「記述句」は記号だが「記述」は記号ではなく、記号が意味する概念のことを指すことになる。

たとえばラッセルがワイトゲンシュタインに出会ったことを念頭に置きつつ、ホワイトヘッドに対して「私はある男に出会った」と発話した場合であれば、

文「私はある男に出会った」
↓意味する
表示概念を含む命題 〈ラッセルはある男に出会った〉
↓表示する
表示概念を含まない命題 〈ラッセルはワイトゲンシュタインに出会った〉

という二段階の意味論的關係が成立しており、ラッセルがワイトゲンシュタインに出会ったということが事実であれば、つまり〈ラッセルはワイトゲンシュタインに出会った〉という命題が真という性質を持つならば、〈ラッセルはある男に出会った〉という命題は（そして「私はある男に出会った」という文は）真になるのである。ここで、表示という関係が語と何らかの対象ではなく、〈ある男〉という概念と〈ワイトゲンシュタイン〉という人物の間に成立する関係であることが重要である。ラッセルは「意味を持つ」ということには心理的な要素と論理的な要素があるが、それが混同されているとする [PoM, §51]。語とその意味する項との関係は、我々はその項を面識し、それを表現しようと考えてその語を発話するということがなければ成立せず、語という存在自身の持つ性質として他の対象を意味するわけではない。語の項に対するこの関係を、ラッセルは「心理的意味」とし、「論理とは無関係」とする [*ibid.*, §51]。一方、表示概念は「その本性上記号的」 [*ibid.*, §51] であるとし、「ある項をその本質から論理的に表示する」として [*ibid.*, §56]、これを論理的意味関係であるとする。つまり、我々が表示概念やその対象を認識するかどうかにかかわらずそれらの間に表示という関係は成立するのであり、また論理学において論じられるべき意味関係はこの表示関係なのである。

以上のようにまとめると、表示という問題が『諸原理』において取り上げられているのは「a」や「the」から始まる記述句や、「all」や「some」のような量化表現に適切な意味論を与えるためだと思われるかもしれない。だが『諸原理』において表示の理論が果たす役割はずっと重い。すなわち、項の存在論という極端な実在論と直接知覚説という認識論的立場を整合的にし、クラスや変項や命題関数という論理的根本概念の存在とそれらに対する認識のあり方を説明するという役割が与えられているのである。『諸原理』のラッセルにとって表示は、数学と論理学を実在論的解釈に基づいて分析するために、必要不可欠な論理的道具だったのである。

先にも見たように、「all」を含む表示句の場合、表示対象はクラスであり、「すべての人間は死すべきものである All men are mortal」という文であれば、すべての人間からなるクラスについて、その要素のすべてが死すべきものであると語るものと言える。我々はこの文が意味する命題を理解し、かつそれが真であると正しく判定することができるだろう。『諸原理』の実在論的論理観と直接知覚説によれば、その命題はすべての人間を構成要素とするのであり、またその命題を理解する我々は、すべての人間を面識しているということになってしまう。だが、果たしてそんなことが可能であろうか。あるいは数学では可算ないし非可算の無限の濃度を持つクラスについて論じられるが、そうしたクラスの要素をすべて面識することなど我々人間には端的に不可能であろう。しかし人間の認識から独立な、項の間の関係としての表示という意味関係があるとすれば、こうしたケースにも対応が可能になる。「すべての人間は死すべきものである」が表現する命題は、すべての人間からなるクラスではなく、表示概念〈すべての人間 all men〉という単一の項を構成要素とするものである。そして表示概念と表示対象との関係は論理的な関係、すなわち我々の思考や表現という心的能力とは独立に成立する客観的で実在的な関係であるため、我々自身が両者の間に橋渡しをする必要がない。それゆえ、我々のような、知的能力においても生存可能な期間に関してもかなり制限された存在が、非常に多くの要素を持つクラスや、無限の濃度を持つクラスについて議論することも可能になる²²。このように表示の理論は、実在論的論理観に即してクラスに関する実

22) 「数のクラスのような無限クラスについては、概念すべての数はそれ自身は無限に複合的ではないにもかかわらず、無限に複合的な対象を表示することを見てとるべきである。これが、無限を扱う我々の、もっとも秘められた能力なのである。」[*ibid.*, §72.] ラッセルは空クラス、すなわち要

在論を採りつつ、その認識の可能性を直接知覚説と整合化するために必要とされるのである。

また表示の理論は、『諸原理』の三つのテーゼと整合的に、変項および命題関数という概念に説明を与える役割も果たしている。すでに見たように『諸原理』においてラッセルは無制限変項の原理を採用することによって論理の普遍性のテーゼを打ち出していた。すなわち変項を個体変項と関数変項、命題変項などに区別せず、物や概念などの単純な項だけでなく、命題や命題関数、クラスなども同じ変項の値になるとされた。さらに『諸原理』においては、単純な項から構成される原子的な命題だけでなく、複数の命題から構成される分子的な命題も一つの項である。したがって論理学が扱うべき項の数、そして命題という項からなる体系の規模は非可算無限の規模を持つことになる。『諸原理』の実在論的論理観からすれば、論理学とはかくも膨大な規模の実在の普遍的構造を

素を持たないクラスも、表示によって対応する。ラッセルによれば、「3より大きい偶の素数からなるクラス」のような空クラスは端的に存在しないが、諸原理の意味論原則をそのままこのケースに適用すれば、「3より大きい偶の素数はすべて2で割り切れる」という文は命題を表現せず、それゆえ無意味と見なされることになってしまう。そこで表示という関係を導入することによって、この文が表現する命題は〈3より大きい偶の素数〉という表示概念を含むとしてその有意性を保持しつつ、その表示概念は表示対象を欠いているとすることで、空クラスの存在にコミットすることを回避するのである。この点に関しては *ibid.*, §73 を参照。また、本章 38 頁での引用文も参照のこと。

容易に推測できるように、同様の対応は「現在のフランス王 the present king of France」のような確定記述のケースにも適用される。それゆえ、PoM の存在論はマイノングの対象を排除することができる。ただし、13 頁での引用に明らかなように、PoM では必ずしも虚構の対象一般へのコミットメントが回避されているわけではない。ここで、PoM から OD にかけての、ラッセルの虚構の対象の扱いについて手短かにまとめておこう。まず PoM では、「現在のフランス王」や「黄金の山」など、表示句の指示対象と想定される虚構の対象は排除されていたが、「ホメロスの神々」や「ペガサス」のように固有名が用いられるケースに関しては、その有意性を保証するため、虚構の対象が認められていた。その後、1903 年の MD では PoM とおなじ表示の理論を採りつつ、その適用範囲が表示句だけでなく通常の固有名にも広げられ、虚構の対象一般へのコミットメントが回避される。そして 1905 年の OD では、表示の理論から記述理論へと移行し、記述理論によって虚構の対象一般へのコミットメントが回避されるのである。それゆえ、ラッセルが表示の理論から記述理論へと見解を変えたのは、虚構の対象の問題とは関係がないとすべきである。記述理論が解決を目指したのは、表示句が生じる文脈によって、表示対象について語ることが意図される場合と表示概念について語ることが意図される場合とがある（言い換えれば、表示句の表現する内容に意味と表示対象の二重性がある）という問題であったと理解すべきである。

不完全記号の学説においては、クラスや系列といった「論理的虚構」にも一定の存在性格が認められるが、これは「現在のフランス王」や「ペガサス」などの字義どおりの虚構とは区別すべきであり、ラッセルもそれらを区別している。この点に関しては 2.5 を参照。

研究する学問であることになるが、こうした存在論では当然、認識論にしわ寄せが来ざるをえない。すなわち、なぜ我々のような有限な生命と知的能力しか持たない存在が、それほどまでに膨大な規模の实在の普遍的構造について論じることが可能になるのかが問題になってしまう。

このような認識論的問題に対して、表示の理論はクラスの場合と同様に解答を与えてくれる。すなわち、論理学が扱う命題は変項のみからなり、また我々が全称命題を使用して推論するときにも変項を含む命題関数とその要素となるのだが、変項も命題関数も一種の表示概念であり単純な存在でしかないため、我々の知的能力を超える規模をそれ自体として持っているわけではない。それゆえ、我々は論理学の命題やさまざまな全称命題を理解すると認めることができる。一方、変項はすべての項を表示し、また命題関数はそれが含む変項を通じて一定の型を共有する命題群を表示する能力を持つ。この表示という関係は、我々が思考し表現する以前に成立している客観的な関係であり、我々の認識能力や心的状態のいかんにかかわらず、我々が表示概念について述定した内容を、いわば自動的に表示対象に移し変える役割を果たす。このように、いわば「ついて性」をシフトさせる働きを持つ表示関係を通じて、我々はすべての項について、そして实在の普遍的構造について論じることが可能になるのである。

ラッセルの見解をもう少し具体的に見ておこう。ラッセルは変項について、『諸原理』の第88節において、変項は表示概念〈任意の項 any term〉と同じ対象を意味するとしている。つまり変項記号が意味する対象である変項は、表示概念〈any term〉と同じ表示の対象を表示するとされている。『諸原理』の第5章²³⁾によれば、「any」が表示句に含まれる場合、表示句に含まれている記述内容が当てはまるすべての対象が表示の範囲内に含まれるが、表示対象となるのはそのうちの任意の一つであり、それがどの項であるかは不確定であるとされる。たとえば「任意の人は死すべきものである any man is mortal」は、すべての人についてではなく、任意の一人について、その人が死すべきであることを語るものであり、どの対象について語っているかは不確定なままである。そし

23) 『諸原理』では、「any」と「all」だけでなく、「a」や「some」、「the」についても、そしてそれらが組み合わされた多重量化文の場合についても、表示の対象がどのようになるかが論じられている。Geach (1962) と飯田 (1987) によれば、『諸原理』における多重量化文の分析は適切なものではない。しかし Dau (1986) は『諸原理』の分析を、多重量化文の適切な分析として解釈することが可能であると論じている。

て「項 term」の概念は言うまでもなく、『諸原理』における根本的な存在論的カテゴリーであり、「それについて語ることができ、思考可能なすべての存在者」が属する概念である。すると変項が〈any term〉と同じ対象を意味するということは、変項のみを含み定項を含まない論理学の命題において、我々は物か概念か、あるいは単純か複合的かを問わず、すべての項のうちの任意の一つについて、どの存在者であるかは不確定なままで語ることができるということになる。

『諸原理』において命題関数は、「不確定な要素を含み、その値が確定されると命題になるもの」[*ibid.*, §22] として規定され、変項を含む対象とされる。そして変項が、特定の項やすべての項ではなく、すべての項のうちの任意の一つを不確定に表示する表示概念〈any term〉であったのと呼応し、命題関数は「一定の形をした諸命題を不確定的に表示する」とされ、any 型の表示概念としての役割を果たすとされている。では、ある命題関数が表示する諸命題の「形」とは何のことだろうか。どの命題関数はどの諸命題を表示するのだろうか。

ここで手がかりとなるのは、「命題の論理的主語」の概念である。ラッセルは、命題はそれを構成する各項へと分析できるだけでなく、論理的主語となる項とそれについての主張へと分析できるとしていた [*ibid.*, §81]。たとえば〈ソクラテスは人間である〉という命題はソクラテスという人物について、それは人間であるということを語る命題であり、〈ソクラテス〉という項と〈…は人間である〉という主張に分析できるとされていた。ラッセルはこうした分析が可能な命題という存在を、「固定された関係に対し、固定された関係が主張されている場合」とするのだが、これと並行して、「命題関数は、変えることができる主語 a variable subject と一定の主張 a constant assertion に分析することができる」としている [*ibid.*, p.xxvii, §81]。つまり〈x は人間である〉という命題関数であれば、〈x〉という変項と〈…は人間である〉という主張に分析できるのである。つまり命題関数は、任意の項を表示する変項と、命題と共通する主張部分からなるのであり、命題関数が表示する諸命題の「形」とは、この共通している主張部分のことである。たとえば〈x は人間である〉という命題関数が表示するのは、〈ソクラテスは人間である〉や〈2 は人間である〉、そして〈ソクラテスは人間であるは人間である〉のように、命題関数における変項部分を任意の項によって置き換えたものとして見なしうる、〈…は人間である〉という主張部分を持つ諸命題のうちの任意の一つである。そして命題関数を普遍量化することは、

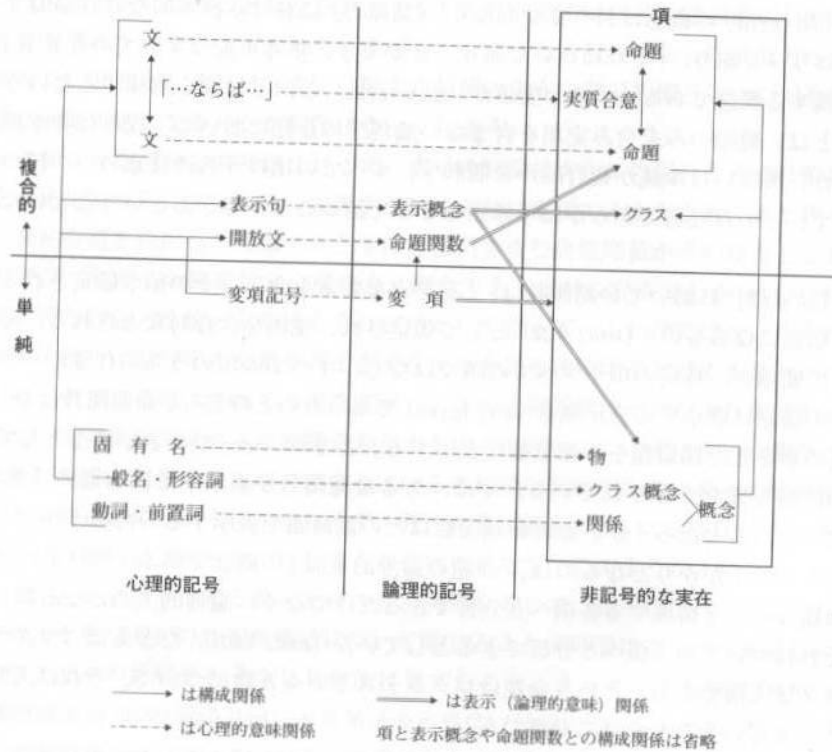


図 1-1

変項という表示概念 (any term) を (all terms) に変えることであり、これを通じて命題関数の表示対象である諸命題のうちの真なる命題の、変項部分に相当する論理的主語のみからなるクラスが形成されるのである。

以上のように、ラッセルは表示の理論によって変項と命題関数という論理学の原始概念を解明しようとするのである。ところで、表示概念は記号ではなく記号が意味する実在物であった。ということは、「諸原理」において変項や命題関数という論理的概念は、現代の記号論理学とは違い、記号ではなく、変項記号や開放文が意味する表示概念という実在の対象であることになる。しかし先にも見たように、表示概念は「本性上記号的」であり、他の項やクラスを表示するという記号的役割を果たす。そしてラッセルによれば、むしろこの表示という関係こそ「論理的意味」という関係であり論理学が考察の対象とすべきな

のであり、語とそれが意味する対象との関係は「心理的意味」関係であり論理的考察から排除されるべきなのであった。逆に言えば、表示が論理的意味関係として重視されるのは、変項や命題関数といった論理学上の原始概念が、表示概念という存在論的身分を持つからなのである。

ここで一度、表示概念も含め、「諸原理」の存在論の概略的な見取り図を与えておこう (図 1-1 参照)。ただし、この図は完全ではないことに注意していただきたい。簡略化するために、一般命題には言及せず、また命題そのものが単純な項として複合的な命題の構成要素となるという再帰的構造も省略している。

いかにして表示概念について語るか

ラッセルが表示という意味関係を「論理的意味」関係として重視したのは、記述や量化表現といった論理的に重要な言語表現に適切な意味論を与えるためでもなければ、マイノングの対象の問題に取り組むためのものでもない。変項や命題関数を表示概念とし、クラスを表示対象とすることにより、論理学という実在をもっとも普遍的に考察する学問の可能性を説明すること、彼の論理主義のプログラムにとって根本的な諸概念を解明しつつ、その実在論的姿勢にとって大きなハードルとなる認識論の問題を解消することがその理由なのである。しかしながら、この表示の理論には、そしてそれを通じて形成された命題関数やクラスの概念にはさまざまな問題があり、ラッセルは項の存在論をそのままの形では維持することができなかった。

まず表示概念一般について、「表示概念について語るにはどうすればよいか」ということが問題になる。この問題を論じているのが、1905年の「表示について」でなされている、「グレイの悲歌」をめぐる有名な議論である²⁴⁾。まず単純に、

24) 以下の論述は「グレイの悲歌」をめぐる議論の中核部分のまとめにすぎず、その全体の整合的な解釈を与えるものではない。この議論の解釈としていまだ決定的なものも存在せず、私自身も決して自分の読みに確信を持っているわけではない (この議論を自分で読まれた方ならお分かりいただけると思うのだが、そうした確信を持つことは不可能である)。ただ、ここで現時点での私の考えを記しておきたいと思う。

まず、1905年のOF (この草稿の pp.381-4) において「グレイの悲歌」の議論の原型が示され、かつその検討を通じて記述理論が発見されている) での議論の文脈を踏まえるならば、ラッセルが意識している問題が「表示句の表現するものが、たとえば信念文のような内包的文脈と通常の外延的文脈とで異なる現れ方をする」という、いわゆる「フレーゲのパズル」であることは明らかである。PoMにおいては、たとえば動詞の意味する関係が「関係づける関係」と「関係それ自身」という二様の現れ方をするとされ、最大の困難として認識されていたが、PoMの本文脱稿後 (本文の表示の

表示概念を主語とする命題を作って、表示概念について語ろうとしてみよう。たとえば〈現在のフランス大統領 the present president of France〉という表示概念を名指す名前を「F」とし、「Fは表示概念である」と主張するとしよう。もしこの文が、我々の意図どおり表示概念について語りえているならば、この文は真である命題を表現しているはずである。「諸原理」の意味論に従うなら、この文が表現している命題は

〈〈現在のフランス大統領〉は表示概念である〉

ということになる。しかしこの命題は

「現在のフランス大統領は表示概念である」

という文が表現する命題と同じである。そして表示概念を要素とする命題は、

理論でこの話題が出されなかったのは、この時点ではまだその問題に気づいていなかったからであろう。本文は1901年に書きあげられていたのである)に読んだフレーゲの著作を通じて、ラッセルは表示句の表現するものも二様の現れをすることを意識するようになった。だが、動詞の場合には同じ一つの関係が二つの現れ方をするという仕方でも事態を理解できるのに対し、表示句が表現する物の場合はそうは考えられない(OF, p.383, OD, p.421の「the centre of mass of the Solar System」と「the centre of mass of the Solar System」の違いについての見解。ちなみにラッセルはこの例をフレーゲの『概念記法』から受け取ったと思われる)。そこで表示句の場合、「意味として現れているもの」と「存在者として現れているもの」を異なる対象として明示的に区別しなければならない。ラッセルは前者を「意味 meaning」と、後者を「表示対象 denotation」と呼ぶ。

だが、ただ意味と表示対象を区別するだけでは十分ではない。両者の間には「表示」という論理的关系が成立しているのだから、その関係の存在を保証し、解明しなければならない。PoMの項の存在論のような徹底した原子論的存在論と外的関係の理論に従うならば、単純な対象間には論理的关系は存在しえない。そこで意味と表示対象を対象として区別しつつ両者の論理的关系を解明することは、一方が他方の部分であることを示すことだということになる。また当時のラッセルの考え方からすれば、以上の事柄を示すことは、異なる対象には異なる記号を割り当て、複合物にはその要素と内部構造を明示する複合的記号を割り当てるという仕方になされるべきである。

そこで意味と表示対象の関係をめぐらる問題のあるべき解決は、①内包的か外延的にかかわらず、いかなる文脈においても意味と表示対象のそれぞれを表現する表記法を与えること、そして②その表記法は、意味や表示対象の内部構造を透明に映し出しており、両者の間に成立しているはずの部分-全体関係が見てとれるようになっていくこと、この二つを達成することである。そうした表記法としてラッセルが検討するのが、任意の表示句Cについて、その意味を表す「the meaning of C」であったり、表示対象を表す「the denotation of C」である。つまりこれらの表現は、文法上は表示句であるが、意味と表示対象という二つの意味内容を持つ表現ではなく、「C」の意味や表示対象を表す複合的固有名として構想されているのだと思われる。

しかし本文中で述べたように、表示句が部分として含まれている表現が意味するものは、その表示対象の関数として決定される(本文中では文を例としたが、複合的固有名に関しても同様である。これは、当時のラッセルが命題と表示複合を「複合物」という同一種のものとして統一的に論じよ

表示概念ではなく表示対象について語るのだから、この命題は〈現在のフランス大統領〉という表示概念についてではなく、特定の一人物について、それが表示概念であるという偽なる主張を行うことになる。表示は、我々の思考とは独立に、表示概念と表示対象との間に成立する関係であったので、「表示句が使用される文脈によっては、表示概念を主語とする命題はその表示概念自身について語るのである」とするわけにはいかない。表示概念が構成要素となる限り、我々の意図がどうであろうと、その命題は表示対象についてのものになる。それゆえ、ある表示概念について語ろうとするなら、当の表示概念そのものを命題の構成要素とするわけにはいかない。

そこである表示概念について語るには、それを表示する別の表示概念を利用するというやり方を採らざるをえない。この場合、二つの表示概念はまったく別ものとしなければならないが²⁵⁾、しかしそうだとすると、両者の関係は「まっ

うとしていたことから、正当な理解だと思われる)。それゆえ「the meaning of C」や「the denotation of C」といった表記法では上の課題を達成できない。ここまでは「グレイの悲歌」をめぐる議論の前半部分、Makin (2000) が「the 'symbolic' round」と呼んだ部分の論理展開である。

以上の問題を受けて、ラッセルは「いかなる文脈でも意味を表現し続ける表記法」を諦める。表示句の表現するものの「意味としての現れ」は、意味としてしか現れえないものであり、直接それについて語ることは(それを試みると、意味は即座に「存在者としての現れ」、つまり表示対象に転じてしまう)が不可能なものだと認め(ODの「意味と表示対象を区別するときには、我々は意味を扱うべきなのだ」[OD, p.422]という発言を私はこう解釈する)、代わりに、表示句はいかなる文脈においても表示対象を表現するのだと考える。そして意味について語るために(これが可能だということ(この段階でようやく)検討する。ところが本文中に示した理由により、このとき表示される意味とそれを表示する表示句の意味との関係が「まったく神秘的」になってしまう。さらにはジョージ4世の命題態度の例が示すように[ibid., pp.422-3]、表示句がいかなる文脈でも表示対象にしか関わらないという考えは間違っている。したがって意味と表示句を区別しつつ両者が論理的に関係するという「問題になっている観点は捨てなければならない」[ibid., p.423]のである。以上が議論の後半部分、Makin (2000) が「the 'substantial' round」と呼ぶ部分の論理展開である。

本註の冒頭でも断ったように、以上の解釈が正しいという確信はいまだに持てないのだが、少なくとも私にはこのようにしか読めない。この問題に決着をつけるには、命題の統一性やパラドクスといった本書では独立のものとして扱った問題と連関させ、中川(2001)が試みているように、当時のラッセルの関数論に踏み込まなければならない。だがそれをするには、新たに本を一冊書き下ろさなければならないだろう。機会があれば挑戦したいと思うけれども、うまくいく保証はない。現時点ではっきりしていることがあるとすれば、①少なくともOFを読み込まないかぎり、ODでラッセルが何をやろうとしていたのかを理解することは不可能であること、②「グレイの悲歌」の議論の主要標的は確かにPoMだが、フレーゲに対しても妥当な批判だとラッセルが考えていたこと、③それゆえ、この議論がフレーゲ批判として成功しているかどうかは検討すべき課題であること、以上の三つである。

たく神秘的」になってしまい、また「どうやってその表示概念を発見すればよいかも分からなくなる」とラッセルは言う [OD, p.422 (邦訳64頁)]。この発言において、一体ラッセルがどのような困難を覚えていたのかは確定しがたいのだが²⁵⁾、『諸原理』で示されている表示関係の成立条件を考慮すれば、別の表示概念を利用するという方策が困難の解決にならないことを明らかにすることができる。

『諸原理』の第73節では、次のように言われている。

……すべての表示概念は、クラス概念から得られる。そして〈a〉がクラス概念であるのは、〈x is an a〉が命題関数であるときである。〈a〉と連合する表示概念が何も表示しないのは、〈x is an a〉がxのすべての値について偽であるとき、そのときのみである。

25) 元の表示概念を部分とする、新しい表示概念を作ればよいのではないか、と言われるかもしれない。たとえば、〈現在のフランス大統領の意味 the meaning of the present president of France〉という表示概念であれば、〈現在のフランス大統領〉という表示概念の意味、つまり〈現在のフランス大統領〉という表示概念そのものを表示することができるのではないか。しかし註24で述べたように、表示概念が複合物に含まれるとき、その複合物は表示概念についてではなく、表示対象についてのものになる。したがって、〈現在のフランス大統領の意味〉は、〈現在のフランス大統領〉という表示概念の意味ではなく、現在フランス大統領という役職についている、特定の人物の意味を表示することになる（そして、結果的には何も表示しない）。

ならば、〈現在のフランス大統領を表示する概念 the concept which denotes the present president of France〉とすればどうか。しかしこの場合、表示対象である特定の人物から、それを表示する表示概念へと逆向きに進むことになるが、そうした表示概念は複数ある。したがって〈現在のフランス大統領を表示する概念〉は、表示対象の一意性という条件を満たさないことになり、何も表示しない表示概念であることになる。以上は「グレイの悲歌」の議論の、六番目の段落におけるラッセルの論点に基づく。

26) 初期ラッセル研究は現在、遺稿に基づいて非常に盛んになっているが、しかしいまだこの問題については、説得的な解釈は出されていない。そのため、たとえばMakin (2000)は、文献的な根拠が薄いことを断りつつ、表示概念を表示する新たな表示概念となりうるさまざまな可能性（たとえば〈a1, a2, a3, a4...を要素とする表示概念〉のように、元の表示概念の要素を枚挙して、唯一そのみが充足する記述内容を持つ表示概念を作る可能性）を検討し、それが不成功に終わることを持って、「神秘的なものになる」というラッセルの主張の妥当性を示そうとしている。

私がここで採りたいのは、PoMにおける表示関係の成立条件に関する考えを背景に、表示の理論に確かに内在している問題を指摘する、という方法である。本節における議論の目的はPoMの体系が抱え込んだ難問を指摘することにあるのだから、この方法で十分それを果たすることができる。またこの方法は、新たな表示概念を作る新たな方法をどれほど巧妙に編み出したとしても、PoMの体系を背景にする限りではそれは成功しないことを一般的に示す点でメイキンの方針よりも強みを持っている。

これは表示概念が何も表示しないケースを定める条件であるが、〈all〉であれ〈any〉であれ、六通りある表示概念のすべてについて成り立つ。この条件の対偶を取れば、ある表示概念が表示対象を持つのは、それと連合するクラス概念を含む命題関数が、少なくとも一つの値について真であるときである、と言える²⁷⁾。さらに、第84節では次のように言われている。

…… ϕx であるような複数の x について考察するとき、ここで ϕx は命題関数なのだが、その場合我々は、命題計算の時には非常に影の薄い使われ方しかなかったある観念を導入する。それは真理の観念である。我々が考察するのは、 ϕx という形をしたすべての命題のうちの真であるものである。すなわち、 x に対応する値が、関数 ϕx によって定義されるクラスを与えるのである。

ラッセルにとってクラスが、表示句が「all」を含む場合の表示対象であり、またそれ以外のケースにおいても、表示対象となる項は「all」の場合に表示されるクラスの要素と同じであったことを思い起こすなら、命題関数を充足する値こそが表示対象となると言えるだろう。まとめるなら、ある表示概念が表示対象を持つのは、それが連合するクラス概念を要素とする命題関数が少なくとも一つの値について真であるときであり、そうした値こそが表示対象の要素となる。

これはごく当たり前の考えに思われるかもしれないが、ここで重要なのは、この考えを『諸原理』の体系に則して理解することである。命題関数とは共通の主張部分を持つ命題クラスを表示する表示概念である。命題関数がある値について真であるとは、命題関数にある項が代入されて真なる命題が形成されることではなく、命題関数とは独立に存在する命題のクラスの中に、真であるものが含まれているということである。たとえば〈xは人間である〉は、〈ソクラテスは人間である〉や〈プラトンは人間である〉、そして〈2は人間である〉などの、〈…は人間である〉という主張を共通して持つ命題からなるクラスを表示するが、その命題関数がある値について真であるということは、〈ソクラテスは

27) ただしこの対偶のほうは、「the」のケースについては不十分であり、「それを真にする値は一つ以上存在しない」という一意性条件を付け加えなければならない。

人間である)や〈プラトンは人間である〉といった、真という性質を持つ命題がそのクラスの要素であるということである。そして第83節からの引用に基づくなら、真なる命題の構成要素のうち、命題関数が示している共通部分以外の要素、すなわちそれらの命題の論理的な主語こそが〈すべての人間〉というクラスの要素になる、つまりは〈すべての人間〉の表示対象の一つになると言える。

このように、あるものが表示対象に含まれるためには (the のケースであれば、表示対象になるのは)、それを論理的主語とする命題が存在し、それが真であるという性質を持っている場合であると言える。だとすれば、ある表示概念を別の表示概念によって表示するためには、前者の表示概念を論理的主語とし、その表示概念について主張する真なる命題が存在しなければならない。だが表示概念が命題に含まれる場合、その命題は表示概念についてではなく、それが表示する対象についてのものになるのであった。したがって『諸原理』の見解を前提する限り、表示関係が成立するための条件は表示概念については成立せず、ある表示概念について別の表示概念を用いて語るという想定を有意味なものとして認めることはできないのである。この問題は、表示の理論の根本的内容にのみ基づくものであるため、任意の表示概念について生じてしまう。つまりある表示概念が別の表示概念を表示するのだと言おうとしても、表示関係の通常成立条件が成り立たないため、その関係がいかんして成立するかが「まったく神秘的なものになってしまう」のである。

変項と命題関数も一種の表示概念であるとされていたため、同様の問題はそれらの論理学上の原始的概念についても生じることになる。我々が普段推論する際に思考の内容となっているのは、我々の認識能力の限界から言って、表示概念としての変項や命題関数であって、それらが表示する任意の項や任意の命題ではないはずである。しかしそれらを用いて我々が議論するとき、それは変項や命題関数そのものではなく、それらが表示する項や命題についての議論であろう。では、そうした任意の項や任意の命題について論じることを可能にしている、変項や命題関数そのものについて語るにはどうすればよいのだろうか。表示概念についてと同様、『諸原理』の体系を背景にする限り、これらもまた解答不可能な問題となる。つまりウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』に15年以上先立つ時点で、すでに論理学は「語りえないもの」になっていたのである。ただ、ウイトゲンシュタインがそれを承認すべき真理だと見なしたのに対

し、ラッセルはそれを課題だと考え、その解決に取り組み続けるのである。

パラドクス

表示対象の側にも困難がある。それは、「all」のケースの表示対象であるクラスにせよ、「any」や「some」のケースにせよ、「the」のケース以外の場合には表示対象を項と見なすことができないという問題である。たとえば「all」の場合、その表示対象はクラスであるが、要素が一つしかないためにその要素と同一であるとされる単位クラス unit class を除き、クラスを項と見なすことはできない。たとえばある部屋に三人の人物がいたとすると、〈その部屋にいるすべての人物〉という表示概念が表示するクラスについては、3であると主張することができるはずである。だが、もしそのクラスが項であるとしたら、項は「単位 unit」もしくは「個体 individual」であるとも言えるとされていたように、それは一つの存在者のはずである。それゆえ、それについて「3である」としてその多数性を主張することは誤りとならざるをえない。この問題に対して、ラッセルは「一としてのクラス」と「多としてのクラス」を区別し、後者を「対象 object」という、項よりもいっそう広い存在論的カテゴリーに属すが、項ではないとする。しかしこれは「項」をもっとも包括的なカテゴリーとし、「任意のものについて、それが項であることを否定することは矛盾である」とした『諸原理』の根本的思考に反するものであり、ラッセル自身も率直にこれを一つの困難として認めている [ibid. §58 への註]。

だが、仮にクラスを項と認めることができたとしても、さらに大きな困難が生じる。クラスを項と認めることは、それらが表示概念 (any term) の表示対象となること、つまり『諸原理』において無制限とされる変項の変域に属するということを意味する。個体を要素とするものであれクラスを要素とするものであれ、クラスもまた一つの個体であり、あるクラスがそのクラス自身を要素とすることがありうることになる。「項」が『諸原理』の形而上学においてもっとも包括的なカテゴリーとされ「任意の対象が項であることを否定することは矛盾である」とされていたこと、そして数学を論理学に還元するという論理主義のプロジェクトにとって、無制限変項及び包括原理が数学的対象の豊富な構成を可能にするという重要性を持つことから、命題関数やクラスが個体と同じ変項の値となることは、ラッセルにとって受け入れるべき仮定である。しかしながら周知のように、ここからはパラドクスが帰結する。「ラッ

セルのパラドクス」と、彼自身の名が冠されたパラドクスのことである。

『諸原理』においてそのパラドクスは次のように説明されている。

一としてのクラスは、多としてのそれ自身の一つの項でありうる。それゆえ、すべてのクラスからなるクラスは、一つのクラスである。たとえば人ではないすべての項からなるクラスが人でない、などの場合のように。このような特性を持つすべてのクラスは、一つのクラスを形成するだろうか。形成するとすれば、それは一としてのクラスとして、多としてのそれ自身の要素になるのだろうか、ならないのだろうか。なるとすれば、それは一としてのクラスの一つであり、多としてのそれ自身の要素にはならないことになり、その逆の想定をすればまた逆の帰結が生じてしまう。[*ibid.*, § 101.]

このように、『諸原理』の本文では先に述べた「一としてのクラスと多としてのクラス」という区別に即して述べられている。ここでその区別を度外視して形式的にまとめてみると、ラッセルが指摘するパラドクスは以下のようにして生じる。自身を要素としないクラスを w とすると、

$$w = \{x \mid x \notin x\}$$

と定義することができる。この定義から

$$\forall x(x \in w \equiv x \notin x)$$

が言える。ここで論理の普遍性のテーゼが正しく、変項 x の変域がすべての項であり、クラス w も項であるとすると、 w もまた x の変域に属することになる。しかし実際に w で x を普遍例化すると

$$w \in w \equiv w \notin w$$

となり、矛盾となる²⁸⁾。

同様のパラドクスが命題関数についても生じる。「グレイの悲歌」の議論が

28) 厳密に言えばこれはまだ矛盾ではないが、ここから容易に「A かつ A でない」のような矛盾を導き出すことができる。命題関数に関するパラドクスについても同様である。

明らかにした困難が克服され、命題関数という表示概念について語る事が可能であり、それを項と見なしえたとしてみよう。このときやはりすべての命題関数も (any term) という表示概念の対象であり、個体変項の値となることになり、それゆえある命題関数はそれ自身が含む個体変項の値になりうることになる。そこで「 x は自身に述語づけることができない」という命題関数を ψx とすると、

$$\forall \phi(\psi\phi \equiv \neg\phi\phi)$$

が言える。しかし論理の普遍性のテーゼが正しいならば、これが含む関数変項 ϕ は個体変項 x と同一であり、また命題関数も項であるならば、その変項の変域にいかなる関数であれ属することになる。しかし実際に ψx でこれを普遍例化すると、

$$\psi\psi \equiv \neg\psi\psi$$

となり、矛盾が帰結してしまう。

このパラドクスに対して、『諸原理』の付録 B でラッセルはタイプ理論による解決を示唆するが、命題と命題のクラスに関して生じるパラドクスが解決できず、「問題の完全な解決がいかなるものになるのか、見出すことができなかった」とせざるをえなかった [*ibid.*, § 500]。またクラスのような多数性を持つ対象を項と見なせないという問題に対しては、表示句を用いてクラスについて語る限り、クラスを命題の論理的主語とすることなく (つまりそれを項とすることなく) クラスについて語りうるということが解決策として示唆されるが [PoM, § 70]、しかしクラスのクラスについて語る場合には、あるクラスを主語とする命題が真であることがクラスのクラスを表示するための条件になるため、やはり十全な解決ではありえない。それゆえラッセルも『諸原理』の前書きにおいて、「……矛盾を適切に解決する、あるいはクラスの本性についてより良い洞察を得る見通しがほとんど得られなかった」 [*ibid.*, p.xxiv] と認めざるをえなかったのである。

このパラドクスが発生する原因は、言うまでもなく無制限変項の原理にある。つまり論理の普遍性のテーゼ、あるいはすべての存在者は項という単一のカテゴリーに属するとする、『諸原理』の形而上学の基礎をなす主張と整合的に、クラスや命題関数の理論を与えることができないということ、このパラドクス

は示しているのである。

まとめ

ラッセルは、関係の存在論的地位を巡る新ヘーゲル主義との論争を通じて、「項」という包括的なカテゴリーに基づく實在論的で原子論的な存在論を形成した。この存在論の基本的特徴を与えるものとして、實在論的論理観、直接知覚説、論理の普遍性という三つのテーゼを挙げることができる。ラッセルはこうした存在論をもとに、『諸原理』において、数学を論理学に還元するという論理主義のプログラムを推進した。この存在論は非常に強力な實在論であるため、認識論にシワ寄せが来ざるをえないが、それは表示の理論が解決する。そして変項や命題関数といった論理学の基本的概念も表示概念であるとするだけで、論理的知識も説明される。だがこの表示概念には、そしてさらに命題やクラスといった論理体系に根本的な概念にはさまざまな困難があり、しかもそれは基本的な三つのテーゼに起因するため、論理主義のプログラムそのものを揺るがせるほど重大なものだったのである。

第2章 「不完全記号」の学説

前章で見たように、「項」を基本概念とする『諸原理』の形而上学は多くの困難を抱えていた。しかもそれは命題やクラス、量化といった彼の論理体系における根本的な概念に関わる問題であった。それらの困難の多くを解消し、彼の論理学、形而上学、そして論理主義のプロジェクトを大きく進展させたのが、1905年の論文「表示について」において初めて発表された、表示句の分析としての「記述理論 theory of description」であり、またそれを通じて得た洞察をさまざまな諸概念に適用して形成された「不完全記号 incomplete symbols」の学説である¹⁾。

2.1 記述理論

『諸原理』は、基本的に非常に素朴な原子論的かつ實在論的な意味論を有していた。単純な語は単純な項を指示し、それを意味とする。複数の語から形成された文は、語が指示する項からなる複合的な項、すなわち命題を指示し、それを意味とする。結果、その命題の主張内容が帰属される対象そのものが命題の

1) 記述理論はラッセル自身によっても、大きな知的ブレイクスルーの経験として語られている。たとえばMPD, p.49 (邦訳81頁)でも、「1905年の記述理論がこうした困難 [引用者注: 関係づける関係と関係それ自身の区別などを指す] を一掃した」と述べられている。ただしこの書でのラッセルの回想は必ずしも額面通り受け取れない。たとえばここでラッセルは、マイノングの対象へのコミットを記述理論が解決した問題の一つに数えているが [ibid., p.64 (邦訳107-8頁)], それは表示概念の理論においてすでに解消されている。また新ヘーゲル主義に反旗を翻して以来、真理の対応説をとり続けていたと述べているが [ibid., p.130 (邦訳224頁)], 『諸原理』の真理論が対応説ではないことは前章で見たとおりである。